びわこの考湖学 5

北陸から京へ　屈指の物流拠点

塩津港

西浅井町塩津の琵琶湖湖岸から昨年、平安時代末期の木札が大量に出土しました。

保延三（1137）年の年紀が墨書された木札には「草部行元若此負荷魚ヲ一巻にても取りなかして候ハ・・神罰・・」と記載されています。この意味は「草部行元は運送を請け負った荷物の魚一巻でも失うことがあれば神罰を受ける」といった起請文です。

この起請文札から、当時の塩津港で水運業を営む専門業者の生き生きとした存在が浮かび上がります。

塩津から深坂峠を越え敦賀に至る深坂峠越は、近江と越前を結ぶ最短ルートとして利用されました。律令格の細則である『延喜式』主税上の「諸国運漕雑物功賃」の項によれば、越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡の北陸6国の物資は、敦賀から陸路で塩津に運び、塩津から湖上を大津まで運送し、京都に運ぶように記されています。ちなみに、若狭の荷物は現在の高島市にある勝野津から大津に運送し、京都に運ぶように記されています。

つまり、若狭以外の北陸諸国の物資はすべて、塩津を経由して京都へともたらされたのです。北陸諸国と一口にいいますが、当時の日本は8つの地域に分けられており、その内の一つということになりますから、莫大な量の物資が塩津から積み出されたことがわかります。敦賀―塩津ルートは、日本海側の地域と畿内とを結ぶ最短ルートとして重要な役割を担っていたのです。

それだけに、平清盛が越前国守護であった平重盛に命じ、琵琶湖と日本海を結ぶ運河の掘削に着手したとされる話をはじめ、塩津―敦賀間を運河で結ぶという計画は20世紀に至るまで幾たびも浮上したのでした。

塩津港遺跡から出土した木札に記載された物資は、「魚一巻」のほか、「米一升若二三升」「白米二斗」「米十石五斗」など米に関係する語句や、「具足」など衣類に関する具体名も出てきます。これは塩津に集積し運送された荷物は、年貢米のほか魚や衣類など多様であったことをうかがわせます。

さらに「盗取」「取不取」「其米取」など、盗賊を想定している言葉がたびたび出現します。鎌倉時代の説話集『宇治拾遺物語』巻第一に、京都の粟田口で越前から運ばれてきた鮭の荷を大童子が盗もうとした物語があります。起請文札に記載された「魚一巻」はまさに、北陸から京都に運ぶ（荒巻）鮭の荷であり、また「盗取」からは当時多くの盗賊が横行していた様子が想定できます。

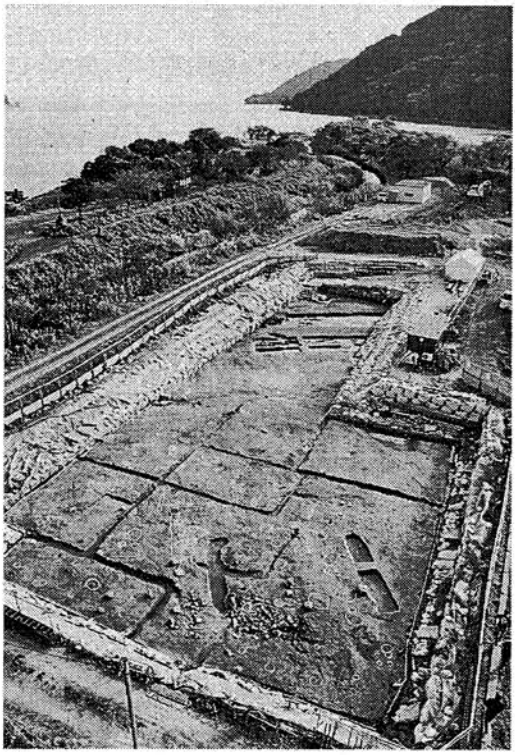
運送を請け負った荷物は決して失わないと起請文を掲げ、信用を確保するためのPRに努めた様子がうかがわれるのです。

なお、『万葉集』第三巻には、笠朝臣金村の歌「塩津山打ち越え行けば我が乗れる馬ぞつまづく家恋ふらしも」があります。

また、平安時代中期（996年）には、紫式部の父藤原為時が越前国守に任ぜられ、紫式部も父とともに塩津から深坂峠を越える際に、この塩津で歌を詠んでいます。

古代の塩津港は、京都から北陸に旅する人々が集まり、逆に北陸から都に運ぶ莫大な物資が積み込まれる日本でも屈指の重要な港でした。

（滋賀県文化財保護協会　濱修）



平安時代末期の木札が大量に出土した塩津港遺跡。国内屈指の重要な港だった＝西浅井町